

「教科横断型授業」の開発研究II：
2009・2010年度協働実践プロジェクトでの取り組みから

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 淑子, 新井, 紀子, 伊禮, 三之, 山本, 博文, 橋本, 康弘, 池島, 将司, 行壽, 宏司, 二丹田, 雄一, 山田, 志穂, 吉村, 祐美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5487

「教科横断型授業」の開発研究Ⅱ — 2009・2010年度協働実践プロジェクトでの取り組みから —

福井大学教育地域科学部	松田淑子
福井大学教育地域科学部	荒井紀子
福井大学教育地域科学部	伊禮三之
福井大学教育地域科学部	山本博文
福井大学教育地域科学部	橋本康弘
福井大学大学院教育学研究科	池島将司
福井大学大学院教育学研究科	行壽浩司
福井大学大学院教育学研究科	二丹田雄一
福井大学大学院教育学研究科	山田志穂
福井大学大学院教育学研究科	吉村祐美

本研究は、2008年度に福井大学大学院教育学研究科で開設された新科目「協働実践研究プロジェクト」の中の「問題解決リテラシー」群による「教科横断型授業」に関する開発研究である。

本報は、2009-2010年度の家庭科・社会科・数学科・理科の教員と大学院生との協働によって開発した、中学校授業『消費社会における問題意識の構築—水問題を素材に—』考案への取り組みと模擬授業実践、及びその省察についての報告である。

キーワード：教科横断型授業、問題解決リテラシー、協働実践、消費者市民社会

1. はじめに

本研究は、2008年度に福井大学大学院教育学研究科で開設された新科目「協働実践研究プロジェクト」の中の「問題解決リテラシー」群による第2回目の取り組みを基盤としている。本研究の目的は、第1回報告¹と同様、現実の生活におこる領域横断的な問題の解決に向けた児童・生徒の能力を育成できるような、「教科横断・問題解決」型のカリキュラムや授業を開発することである。

本報では、専門教科が異なる本群担当の教員らと、2009・2010年度入学の本カリキュラム群を受講する大学院生らとの協働の取り組みと、そこで開発した「教科横断・問題解決型授業」の単元プログラムについて報告していきたい。メンバーは、家庭、社会、数学、理科の教員5名と家庭、社会、数学の大学院生8名である。

2. 第1回報告からの省察

2008-2009年度の本プロジェクトに関する第1回報告では、「問題解決型授業」プランとして、小学校及び中学校における「ゴミ問題」「地球環境問題」にかかわる授業案を作成し、実践、省察した。

考案した授業案を実践することができたこととともに、各教科連携型授業の一スタイルとして、「問題意識の深化—私的な領域の問題解決—公的な領域の問題解

決」の提案、及び各教科の「問題解決」の手順を提示できたことが成果として挙げられた。

省察として、扱った教材が実際には未習領域のものであったことなど、「投げ入れ」授業の困難性があげられた。また、「問題解決リテラシー」の育成と「教科横断型授業」の関連性、「教科横断型授業」で社会問題を取り上げる必要性等について論じることが今後の課題として残された。

これらの省察や課題を含みつつ、一部の教員と大学院生が入れ替わり、第2回の取り組みが実施された。

3. 「問題解決リテラシー」群の取り組み

(1) 第1期（2009年度前期）

第1期では、2008-2009年度同様、「PISA調査」実施の経緯や背景、またPISAの提供する「問題解決リテラシー」の具体について、主に教員のレクチャーをもとに議論等を行うことによって全員での共通理解を深めた。

また、数学科・家庭科・社会科の各教科において捉えられている「問題解決」のあり方や論理について、学習指導案等の具体的な資料を調査・報告し、確認し合った。

(2) 第2期（2009年度後期）

第2期では、はじめに、現代社会や現代生活において重要だと思われるテーマについて検討、選定した。その

結果、全体のテーマを「情報」の問題とし、各大学院生が教科の特性を踏まえながら小テーマ（課題）を設定した。その小テーマ（課題）について、各自で調査・考察を行い発表した。このことは、テーマについての理解を深めるだけでなく、児童・生徒が行う「問題解決」のプロセスを実際に授業者となる大学院生自身が体験するという意味を含んでいる。自身が「問題解決」学習の主体者となることは、今後授業づくりを行う上で重要な経験となった。

(3) 第3期（2010年度前期）

第2期のテーマ「情報」の問題を単元とし、各教科の特性や論理を踏まえた「問題解決」型の授業案を考案した。

しかし、考案された授業案では、2008-2009年度を取り組みにおいて生じた課題の一つ、未習領域の問題が再び生じた。さらに、教科ごとに問題提起から問題解決までを完結させ、それらをオムニバス形式で展開したため、全体としての流れが曖昧になった。具体的な生徒、つまり授業対象者が想定できない中で内容検討にも困難が生じ、授業づくりは混迷した。

(4) 第4期（2010年度後期）

第3期の課題について検討の結果、学年段階を考慮し、また、詳しくは次章で示すが、テーマそのものの重要性も鑑みた上で、中学生対象「消費」の問題へと授業のテーマを再設定した。さらに「水」を中心題材にすることにし、大幅な内容修正を図った。

学習指導案の検討を重ね、最終的な実践活動として模擬授業を行った。模擬授業は福井大学において、2010年11月30日・12月7日に実施した。家庭科・数学科・社会科の大学院生がそれぞれ1名ずつ、各1時間の授業を担当した。「問題解決リテラシー」群のメンバー全員が参加し、授業担当以外の大学院生と教員は生徒役を務めた。授業終了後、全員で授業の省察を行った。そこで明らかになった課題を踏まえて「問題解決」型学習指導案の修正を行った。

4. 「消費」をテーマとした「教科横断・問題解決型授業」の意義ⁱⁱ

はじめに、本模擬授業のテーマ「消費」についてその重要性を示したい。

資本主義経済の進展により「生産」と「消費」は分断された。さらにその主軸は「生産」から「消費」へと移行し、現代社会に生きる人々にとっては、生まれてから死ぬまで常時「消費者」であることが当たり前となっている。

消費の増大は当然、消費に関わる諸問題を引き起こし、「消費者トラブル」が続出するようになった。日本における「消費者トラブル」は、高度経済成長期に端を発している。当初は、例えば合成洗剤や食品添加物による健康被害など、商品の安全性に関わるものが主であったが、

やがて1980年代以降には、急増したカード使用などによる契約取引型被害や悪質商法による被害へと移行してきた。

このような状況を受け、高度経済成長期以降「消費者教育」への要請が高まった。学校教育では、家庭科を中心に、社会科（公民科）等において、1988年告示の学習指導要領以降、「消費者教育」が明確に示されるようになってきた。当初は、「消費者保護」の立場から形成されており、弱者である消費者が被害を受けないよう、または受けた場合の対策を伝授することが主な教育目的であった。しかしその後、1998年告示の高等学校家庭科学学習指導要領において初めて「消費者の権利と責任」の項目が加わり、2008年告示の中学校家庭科学学習指導要領でも「消費者の基本的な権利と責任」の項目が加わり、学校教育において、「保護されるだけの消費者」教育から「責任ある消費者」教育への転換が確立した。

また、2004年の「消費者保護基本法」から「消費者基本法」への改正・改称や、2008年度生活白書で示された「消費者市民社会」への構築の提案、2009年の消費者庁発足、などを受け、「消費」への眼差しが増すとともに、「消費」を通した「市民」育成の兆しも見え始めた。

地球環境問題や資本主義経済の行き詰まりを感じさせる昨今の社会において、「消費」のあり方は、自分自身の生き方や未来社会のあり方につながる、全ての人々に共通した重要課題である。消費者としての権利と責任のもとに自分自身の生活や生き方、そして社会全体を見直していくという姿勢を培うこと、消費者市民教育を浸透させることは、現代社会において重要な課題となっている。とりわけ、次代を担う子どもたちの教育現場としての学校が、そのことを重要な柱と掲げることは必然のことである。

以上に示したことから、「消費」をテーマにした授業開発を行うこととした。

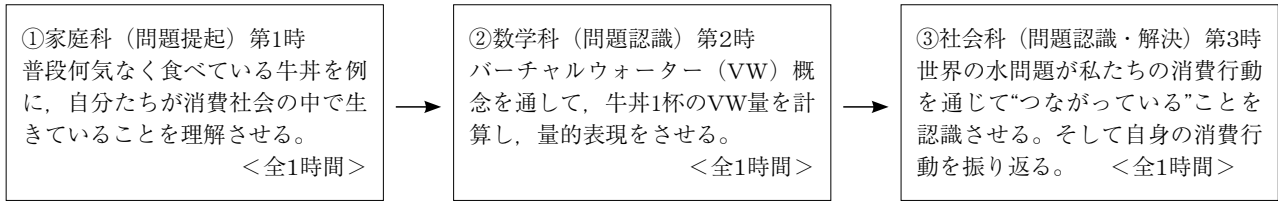
このようなダイナミックなテーマを扱うには、教科を横断した総合的な学び、「教科横断型授業」の開発が期待される。同時に、本テーマで中心的に扱う内容は、今現在の社会全体にとっても未解決の重要課題である。「正解」はもちろん、進むべき方向性も確立されていない。このような内容における授業のあり方として、「問題解決型授業」を提案したい。

現代社会の喫緊の課題をテーマとした、「教科横断・問題解決」型の本授業開発は、現代の教育のあり方において、一つの重要な提案ができるものと考えられる。

5. 模擬授業の概要

中学校における授業実践を想定した模擬授業を行った。模擬授業の実践は、家庭科（山田）、数学科（池島）、社会科（行壽）が担当した。

表1：単元構成（全3時間）



(1) 授業構想

技術の進歩により、私たちの生活は豊かさを増しているが、その一方で、大量生産・大量消費が環境問題をはじめとする様々な問題を引き起こしている。私たちは消費者としてのあり方を強く意識しなければならない。現代における私たちの消費行動が様々な問題を引き起こしていることを、中学生も、自らが一消費者としての自覚のもとに考えて欲しい、という思いから本授業案を作成した。

・テーマ：『消費社会における問題意識の構築
—水問題を素材に—』

・対象学年：中学校3年生

・授業目標

- ①自分たちの消費行動が社会に影響を及ぼしていることに気付く。
- ②これからの消費のあり方について、一生活者として、一社会人として考えようとすることができる。
- ③水を取りまく世界規模の状況の一端を知り、問題意識を持つことができる。

・単元構成（全3時間）：表1参照

(2) 授業展開の概要

第1時では、普段何気なく食べている牛丼の価格の変化に注目し、なぜ遠い海外からの輸入肉が国産肉よりも安くなるのかについて考察した。そして、安さを追求していく今の消費のあり方に問題がないかを見直した。特に、問題意識をより明確にする手立てとしてパーチャルウォーター（以下、VW）の考え方があることを中心的に学んだ。

第2時では、第1時で触れたVWの概念を具体的に認識できるようにするため、牛丼1杯のVW量を計算した。さらに1年間に日本で使える水の量と地球全体で使える水の量を比較し、私たち日本人がいかに水を使っているかを認識した。

第3時では、食料の輸入に着目し、具体的な水問題と私たちの消費行動とを結び付けて問題を考えた。はじめに、アメリカの小麦が地下水を使って大量生産されていること、その地下水の過度のくみ上げが水不足問題を引き起こしていることを知り、水不足の背景に安いものを追い求める私たちの消費生活があることを認識した。そしてこれまで学んだことを通して、自分自身の食生活にかかわる消費行動について、問題意識をもった。

6. 授業案

以下、模擬授業『消費社会における問題意識の構築—水問題を素材に—』の修正授業案（家庭科・数学科・社会科各1時間、全3時間）を表2・3・4に示す。実践の際の指導案及び修正案に至る前の反省事項は割愛する。

7. 模擬授業の省察及び本研究の考察

模擬授業全体の省察をもとに、本研究全体についての考察を行う。

(1) 「問題解決」型授業についての再考

単元構成では、家庭科「問題提起」、数学科「問題認識」、社会科「問題認識・解決」と計画した。しかし、社会科では、教師の教示により、問題の深刻性を生徒に認識させた後、「自分の消費行動を振り返って、どうすれば良いかを考えてみよう」と投げかけて授業を終了した。従って、最終時は「問題認識・提起」であり、本模擬授業全体を通して、「問題解決」まで至った授業がなかったことになる。

しかしながら、世界的な水問題にはあらゆる事情が複雑に入り混じっており、3～4時間の授業の中では解決まで至るのは不可能なことである。それでも、生徒にしっかりと問題を認識させることで、自身の行動に影響を与え、長期的には問題解決に至って欲しいという希望を込めることを優先した。教材に対する教師の強い思いも、授業には非常に重要だと考える。

もちろん、「問題解決リテラシー」を育む授業は、単元構成に示したように、「問題提起」⇒「問題認識」⇒「問題解決」のような工程をたどることが一般的である。しかし、現実の生活や社会では簡単には解決に至らない問題に取り組むことの方が多くとともに、寧ろ問題に気づくことそのものが最も重要な場合も少なくない。そのように考えた時、本模擬授業実践で行ったような、重要な社会問題についての問題意識を持たせる授業もまた、「問題解決リテラシー」を育む授業の一つのタイプとして位置づけることも可能だと思われる。

(2) テーマや問題を生徒自身のものにすること

本模擬授業は全体を通して、教師主導で進められており、生徒の学習活動はそれに沿うことに終始してしまった。これは、本授業案を構想する際、「問題解決リテラシー」を育てるという、協働実践プロジェクトにおける根本的な目標以前に、「消費者教育」で認識させたいこと、

表2 1時間目 家庭科「問題提起」の授業案

◇題材の目標		
・自分たちが消費社会の中で生きていることを認識する。 ・普段自分たちが安い価格で食べているものの背景を知り，問題を認識する。		
◇学習指導過程		
	主な学習内容	留意点
導入	・ 普段あたりまえのように食べているものについて学習することを 知る。	
展開 1	・ 某チェーン店の牛丼について →どれくらいの値段で食べられるか？ ○250円～350円くらい →昔はどうだったのか？ ○今よりも肉は高かった。 ○同じくらいでしょ？ →実はサラリーマンの初任給が5,000円の時代に一杯200円で売られていた。 *その後…1965年（昭和40年） 銀行員初任給25,000円の頃，並盛が200円だった。（現代の1400円相当） ・ 牛肉について →高価だった牛肉が今安いのはなぜだろう？ ○生産の仕方が変わった。 ○アメリカから輸入してるから。 輸入肉はどうやって安くしているのだろう？ →輸入牛肉が安いということは，どこでコストを削減しているのだろう？ ○飼料 ○土地 ○人件費 ○管理費（検査など安全面） etc →なぜ生産者はそんな努力をして安い肉を作ろうとするのだろう？ ○安くないと売れないから 安さを追求していく今の消費社会の在り方はこのままでいいのだろうか？ ・ 牛肉がつくられる過程に必要な穀物や水について知る。（バーチャルウォーター）	・ 肉に対する消費者の価値観の変化や，本来は生産に費用がかかるはずであるのに安く売られていることを実感させるための一例としての牛丼。 ・ 肉が食卓に並ぶことが当たり前の現代では，特別な時にしか肉を食べられなかったような時代があったことすら生徒たちは知らないかもしれないので，昔の食卓の風景や肉の消費量，値段の変化の資料などを用いる（資料1）。 ・ 品目別輸入率の推移（資料2）をもとに，牛肉の輸入が増えていることを確認する。 ・ まずは生徒に予想させ，生産者側が「いかに早く」「いかに安く」生産しているかを知ってほしい。 ・ 出来るだけ早くコストをかけずに生産されているプロイラーについても一例として紹介する。 ・ 消費者の安いものを求め，選ぶという行為が生産者側に影響を及ぼしていることに気付かせたい。 ・ 生産者側が消費者の欲求をあおっているという側面もあることにも触れ，消費者と生産者の相互関係によって今の消費社会が成り立つことに気付かせたい。 ・ 安いものを求め続けていくことに疑問を持たせたい。 ・ コスト削減の話に戻り，牛肉ひとつの裏側には大量の飼料があり，さらにその裏に大量の水が使われていることに気付かせたい（資料3）。 ・ 今の消費社会の在り方における他国への影響という視点も踏まえて，バーチャルウォーターの問題について認識できるよう支援する。
まとめ	・ 次回の授業でバーチャルウォーターの問題について考えていくことを知る。	

表3 2時間目 数学科「問題認識」の授業案

◇題材の目標		
・VW量の具体的な数値を明らかにし、問題を明確にする。 ・VW量の数学的表現を通し、問題を実感させる。		
◇学習指導過程		
	主な学習内容	留意点
導入	前回までに学習したことを振り返る	・私たちが直接手にする商品が生産されるまでにはたくさんの工程があり、商品そのものだけでなくその背景にある多くのものを消費している。
展開1	牛井のヴァーチャルウォーター（VW）量を計算してみよう	
	表から必要な情報を抜き出し、計算する ○牛井1杯にはどれくらいの水が使われているのかを予想する。 ○牛井に使われている食材を表から探す。 ○VW量を必要な単位で計算し直す。	・いくつかの意見を採り上げ、残しておく。 ・牛井のレシピ（4人前）配布 ・VW量一覧表配布、使い方を説明する。 ・電卓配布
	計算	
	(m³/t)：1トンあたりの立方メートル量 →(ℓ/kg)：1キロあたりのリットル量 (∵1m³=1,000ℓ, 1t=1,000kg) →(0.001ℓ/g)：1グラムあたりのリットル量 (∵1kg=1,000g)	牛肉： 1tあたり20,600 m³ →1gあたり20.6 ℓ ∴牛肉300gには20.6 ℓ /g×300g=6,180 ℓ の水が使われている。
	たまねぎ： 1個あたり38 ℓ	醤油： 大さじ1あたり17 ℓ →醤油大さじ4杯には68 ℓ の水
	酒： 大さじ1あたり19 ℓ →酒大さじ3杯には57 ℓ の水	砂糖： 大さじ1あたり13 ℓ →砂糖大さじ3杯には39 ℓ の水
	ご飯： 1杯あたり278 ℓ ご飯4杯あたりには1,112 ℓ の水	牛井4人前： 6,180 ℓ+38 ℓ+68 ℓ+57 ℓ+39 ℓ+1,112 ℓ =7,494 ℓ →牛井1人前 7,494 ℓ÷4=1,873.5 ℓ
	吉野家では年間2億杯の牛井が販売されている ○日本での牛井に関する年間VW量を計算する。	・牛井1人前ではどれくらいの量になるのかを具体的な数値から感じさせたい。 1,873.5 ℓ×200,000,000=374,700,000,000 ℓ =374,000,000m³
展開2	それだけの水を日本だけで用意したらどうなる？	
	牛井のVW量と日本の水資源賦存量を比較する ○年間に使える量と牛井のVW量を比較する。 410,000,000,000m³ 374,000,000m³ ○生活用水・工業用水・農業用水も含めて考える。 410,000,000,000m³ － 83,100,000,000m³ →326,900,000,000m³	・日本の水資源賦存量は約4,100億m³ →約3,200m³ /人 (∵日本の総人口は1億2751万人) ・平成19年における全国の水使用量は、合計で約831億m³である。 ・ようやく0.1% ・牛井は吉野家だけではない。 ・毎日牛井以外にもたくさんの食事をしている。

展開 3	日本に無いなら世界からもらってほしい？	
	地球の水資源賦存量を知る	・地球上に存在する水の量は約14億km ³ , そのうち河川や湖沼などの水として存在するのは約0.001億km ³ 。
まとめ	日本はたくさんの水を使っている	・次回は…

表4 3時間目 社会科「問題認識・解決」の授業案

◇題材の目標		
・消費社会における問題を認識する。 ・アメリカ合衆国の農業の仕組みがわかる。 ・自分たちの消費行動が社会に影響を及ぼしていることに気づく。		
◇学習指導過程		
	主な学習内容	留意点
導入	・ 前回までの復習	・ 牛井が作られる過程に大量の穀物や水が使われている。 ・ 価格競争の結果、コスト削減のためにその方法が採用されており、それは我々消費者の消費傾向からきている。
展開 1	・ アメリカの小麦について →パンは何から作られているか ○小麦 →どこから輸入しているのか ○アメリカ合衆国 →どうやって作っているのか ○機械で大量に水をまく ○広大な土地で大規模に行う ・ なぜ実現可能なのか資料集等を使って調べる。 ○小麦地帯には大量の地下水がある ○この水を機械でくみ上げることで大量の小麦が生産できる。 ・ 日本との関係を軸に考察する。 →日本は多くの小麦を輸入しており、パンなどの小麦食品が安価で手に入るのはアメリカ合衆国の大規模農業に支えられている。大量生産大量消費によって、私たちの豊かな生活は実現できている。	・ 中学地理分野のアメリカの農業と関連付ける。 ・ 小麦は輸入が86%であり、そのうちのおよそ6割がアメリカ合衆国からであり、多くをアメリカ合衆国からの輸入に頼っている。 ・ 米国中部では、テキサス州北部からオクラホマ州、カンサス州、コロラド州、ネブラスカ州に至るオガララ帯水層と呼ばれる広大な地下帯水層の地下水を利用した「センターピポッド方式」による大規模農業が展開されている。センターピポッド1つあたり、一日400万ℓの地下水を揚水している。お風呂の水使用量はおよそ300ℓであり、比較させることで、どれほど大量の水が使用されているかを実感させる。 ・ 小麦地帯の地下にあるオガララ帯水層は琵琶湖の水、150杯分に相当する4兆tの水が蓄えられている。これは数千年にわたって蓄えられたものであると考えられている。
展開 2	なにが問題なのか ・ 地下水のくみ上げにより、大規模農業を実現しているが、その結果、水不足を引き起こしている。 ・ ビデオにて農家の人のインタビュー映像を流す。(NHK『サイエンスZERO 2005年10月8日分「地下水が消える？世界の水危機」マイケルマイヤーさん・キースレビンさんインタビュー部分) ・ 今現在のアメリカ合衆国の農業のあり方が崩壊した場合、小麦の値上げなどが懸念される。今までの様に安価でパンを食べることができなくなるかもしれない。 ・ 私たちの安いものを追い求める消費行動が、数千年かけてたまった水を使い切ってしまった。 →どう考えるか ○今までのやり方では問題が生じてきている。新しい技術、手法を考えるべきだ。	
		・ アメリカ合衆国の大量生産は多くの水資源によって支えられていた。しかし、降水によって涵養される水量（年間60～80億m³）の約3倍にもなる年間222億m³の地下水を汲み上げているため、数千年かけて溜まった水であるにもかかわらず、地下水位の低下が問題となっている。そしてそれに伴う揚水コストの上昇により、依存している多くの農民が灌漑農業を放棄している。 ・ とうもろこしによって十分に成長した牛は、大規模な食肉工場に肉に加工される。箱に詰められた冷凍肉は世界に輸出され、私たちの豊かな生活を実現させてくれる。

	○私たちの安いものを追い求めるあり方が大量生産・大量消費を引き起こしている。そこを直すべきだ。	
まとめ	・自分自身の食生活を今一度問い直す →大量生産、大量消費により安価で豊かな食生活を送ることができるが、それは水不足や水質汚濁などの問題を引き起こす。残飯などは、食品のみならず、そういった国から間接的に「輸入した水」も捨てていることなのである。	・世界の状況を把握し、問題を認識することで、自分自身の消費行動のありかたを省みることができる。

「水問題」を通して気付いて欲しいこと、などに重きが置かれてしまったことによるのかもしれない。

周知のように、単に生徒任せのテーマ選びをよしとすることには問題もあり、本実践のように教師が重要と考える問題を示唆することの意義は大きい。そこで重要なのは、最終的にその問題が生徒自身の問題となったかどうかではないだろうか。教師の問題提起を受け、生徒自らが探り、生徒同士、場合によっては教師や学外の人も交えた議論を通して練り上げ、生徒自身の問題としていくプロセスを丁寧に行う場を保障することが必要であると考ええる。

このような展開を組み込むことを今後の授業開発における課題としたい。

本実践は、問題解決学習の第一段階である「問題特定」のための第一ステージと位置づけることがふさわしいと言えるだろう。

(3)「教科横断型授業」のあり方について

本授業案作成にあたり、問題解決リテラシーを育むための「教科横断型授業」のあり方について、以下に示す2通りの方法があることを認識した。

一つは、昨年度の取り組みのように、テーマに対して、それぞれの教科において、問題提起から解決までを行った授業を作成し、オムニバス形式でつなげていく方法である。

もう一つは、問題提起から解決までをテーマを貫いた一つのストーリー上に位置づけ、その大きなストーリーの中に必要に応じて各教科の専門性を埋め込んでいくという方法である。

本実践では、当初前者の形で授業構想を始めたが、議論を積み重ねていくうちに後者に傾斜していった。このことに関しては未だ議論や検討の余地は多く、今後の課題としたい。

8. 総括及び終わりに

本研究では、2年間にわたる教員と大学院生との取り組みを通して、中学生を対象とした「問題解決リテラシー」育成のための「教科横断型授業」の開発を試みた。

教科や立場、価値観等の異なる複数の者の協働によって授業を開発する際の難しさと意義を共に実感しながら作成し、実践した模擬授業『消費社会における問題意識

の構築—水問題を素材に一』を通して、以下の考察と課題を得た。

①テーマの選定と「教科横断・問題解決型授業」の重要性

現代社会・現代人にとっての喫緊の課題を授業で扱うことは重要である。そしてそのようなダイナミックな、しかし未解決課題を含むテーマを授業で扱う際、「教科横断・問題解決型授業」が有効である。

②「問題解決型授業」の再考

現実の生活や社会では簡単には解決に至らない問題に取り組むことの方が多くとともに、寧ろ問題に気づくことそのものが最も重要な場合も少なくない。重要な社会問題についての問題意識を持たせる授業もまた、「問題解決リテラシー」を育む授業の一つのタイプとして位置づけることを提案する。

③テーマや問題を生徒自身のものにするための方策

「問題解決型授業」に取り組む時、初発の問題を教師が設定する場合においても、生徒たちが設定する場合においても、重要なのは、最終的にその問題が本当の意味で生徒自身の問題になり得たかということである。本模擬授業案では、そのための方策を充分とりきることができなかった。生徒自らが探り、生徒同士の、場合によっては教師や学外の人も交えた議論を通して練り上げ、問題を生徒自身のものにしていくプロセスをとりいれた授業案の作成と実践を今後の課題とする。

④「教科横断型授業」の二つのあり方（オムニバス・ストーリー）の検討

2008-2009年度の「問題解決リテラシー」群の取り組みで提案したオムニバスタイプの「教科横断型授業」と、本年度実践したストーリータイプの「教科横断型授業」、その双方のタイプについてのメリット・デメリット等についての検討について、今後の課題とする。

本研究における授業案は、模擬授業のみの実践であり実際の授業をするには至らなかった。しかし、授業案作成のための議論や検討、教材研究には多くの時間を費やした。一つのストーリーを打ちたてながら、複数の者が介入して授業案を作成するには、多大なエネルギーと時間を要したが、その難しさや厳しさと同時に、授業づくりの醍醐味も感じるができたと思われる。

これから教師となっていく大学院生たちが、この経験

松田 淑子, 荒井 紀子, 伊禮 三之, 山本 博文, 橋本 康弘
池島 将司, 行壽 浩司, 二丹田雄一, 山田 志穂, 吉村 祐美

と授業から得た課題を生かし, 将来, 実際の現場で長期
にわたる実践に挑戦して欲しい。

参考文献

ⁱ 橋本康弘・荒井紀子・伊禮三之・山本博文・香川喜一郎・
奥山和彦・下池未紗・松田真依・市川薫・鎗木優佳・

永井良次, 2011, 「教科横断型授業」の開発研究Ⅰ－
2008・2009年度協働実践プロジェクトでの取り組み
から－, 福井大学教育実践研究第35号67－78頁

ⁱⁱ 松田淑子, 2011, 『現代社会における「消費者市民教
育」の可能性』, 日本教育社会学会第63回大会要旨集
92－93頁

The Study of Developing Lesson Unit based on “Cross-Curriculum”(II): The Case of Curriculum Development for Competency and Literacy II in 2009 and 2010

Toshiko MATSUDA, Noriko ARAI, Mitsuyuki IREI, Hirobumi YAMAMOTO, Yasuhiro HASHIMOTO, Masamori IKESHIMA, Hirokazu GYOJU,
Yuichi NITANDA, Shiho YAMADA, Yumi YOSHIMURA

Key words : Lesson Plans based on “Cross-Curriculum”, Literacy of Solving the Problem, Community of Practice, Consumer Citizenship